様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２２９２

研究課題名（和文）木村黙老の文事に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic study on the literary matters of Kimura Mokurou

研究代表者
三宅　宏幸（MIYAKE, Hiroyuki）

愛知県立大学・日本文化学部・准教授

研究者番号：９０６３６０８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、讃岐高松藩家老で曲亭馬琴の友人でもある木村黙老の文事をテーマとする。研究期間を通して黙老の文事の根本となる彼の蔵書について調査を行った。報告者は多和文庫所蔵『高松家老臣木村亘所蔵書籍目録残欠』を発見したことで、それを手掛かりに探索した結果、『梅桜日記』『消暑漫筆』『銅柱余録』『松蔭日記』『古今説海』などの書物が黙老の旧蔵書であると判明した。また黙老宛の書翰を調査し、以下のことが判明した。山崎美成と書物の貸し借りをしていたこと、江戸の出版事情について石塚豊芥子から情報を得ていたこと、小津桂窓に文人画の入手を依頼していたことなどである。以上により、様々な文人との繋がりも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
木村黙老は讃岐高松藩の家老をつとめ、近世後期に活躍した曲亭馬琴とも交流をもった人物である。彼の蔵書は「一棟の倉」に詰まったともいわれ、一藩の家老をつとめた人物がどのような蔵書を構築したのかを明らかにすることは、当時の武家における蔵書文化がいかなるものであるか、またどのような書物から情報を得ていたかを知る点で、歴史研究などにも資することができる。加えて黙老は『聞ままの記』『続聞ままの記』などの随筆を著述しており、随筆の知識源を明らかにすることで、当時の書物文化を明らかにすることにも繋がった。
本研究は文学研究に加え、地域の歴史や社会研究に発展する学際的な研究といえる。

研究成果の概要（英文）：The theme of this research is the writings of Mokuro Kimura, a chief retainer of the Sanuki Takamatsu clan and a friend of Bakin Kyokutei. Throughout the research period, I researched his library, which is the basis of Mokuro's writings. The reporter discovered the Tawa Bunko's "Takamatsu vassal Kimura Wataru's book catalog", and as a result of searching with it as a clue, "Umesakura Nikki", "Shosho Manpitsu", "Douchu Yoroku", "Matsukage Nikki" and "Kokon Sekkai" were in Mokuro's old collection. In addition, I found that in the letters addressed to Mokuro and found the following. For example, he lent and borrowed books with Yoshishige Yamazaki, received information from Hokaishi Ishiduka about the publishing situation in Edo, and asked Keiso Ozu to obtain literati paintings. From the above, the connection with various intellectuals became clear.

研究分野：日本近世文学

キーワード：黙老　馬琴　正斎　美成　豊芥子　桂窓

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

報告者は曲亭馬琴（１７６７～１８４８）の読本を中心に、読本の作者が作品を著述する際に、どのような資料を用い、またどのような知識を基にしていたのかを、作者自身の考証随筆や友人と交わした小説批評などとの関連がないかなどについて検証を行ってきた。

その研究を行う過程で、馬琴の旧蔵書を目する機会が多くなってくる。近世の作者の中でも、馬琴の旧蔵書は比較的多く現存しており（早稲田大学図書館、天理図書館等に所蔵）、その旧蔵書に見られる書き入れなどは、馬琴の考えや、あるいは書籍の貸借による知識の交流を把握する上で重要であった。そして馬琴の旧蔵書を探索する際に重要な人物の一人として、讃岐高松藩で家老を務めた木村黙老（１７７４～１８５７）があげられる。黙老は江戸家老をしていた際に書肆の仲介によって馬琴と出会い、その後交流を結んだ。息子の宗伯を失った馬琴が瀧澤家の将来の不安から、孫のために御家人株を購入することを決めた際、蔵書を売却した人物でもある。そのため、黙老がいた讃岐（現在の香川県）には、馬琴関係の資料が残っている。これまで知られているものでも、『日本霊異記』『房総志料』『旅宿打聞』『湘山移星集』などの馬琴旧蔵書が香川県の多和文庫や香川県立ミュージアムに収蔵されている。黙老の蔵書目録については、宮内庁書陵部図書寮文庫蔵「讃藩黙老木村氏蔵書目録」（『静幽堂叢書（第５５冊・芸苑部）』が知られていたが、報告者が多和文庫の蔵書を調査していたところ、黙老の蔵書目録『高松家老臣木村亘所蔵書籍目録残欠』を発見した。この書籍目録を見ると、馬琴と書籍の貸借を行い、あるいは批評を交わし、大部の随筆『聞ままの記』を著した黙老が、どのような書籍を所持し、その知識源がどこにあるかを研究する際の重要な資料と認めることができる。

黙老の事蹟については、従来、黙老と馬琴との関連を記した木畑貞清氏の単著『木村黙老と滝沢馬琴』（１９３５）があるものの、黙老の文事を中心に据えた研究は少ない。しかしながら、黙老の著作には馬琴研究だけでなく、近世演劇や近世随筆の研究に資する資料も多く含まれる。例えば、黙老が様々な情報源から書き記した『聞ままの記』には、演劇や落語関連の貴重な資料が記載されていることが指摘されている（松平進氏「木村黙老と上方浮世絵研究」１９９５、服部仁氏「肖像画入咄本『連中似顔噺廼当婦利』」２００９）。黙老の文事の検証は、様々な研究分野への足がかりとなり得る。

したがって、黙老の蔵書構築や知識源を探ることは、日本近世後期における文人の知の交流を明らかにする手掛かりとなると考えられる。

２．研究の目的

報告者は馬琴読本の出典研究を行う中で、馬琴の知友、伊勢の殿村篠斎や小津桂窓、讃岐の木村黙老といった蔵書家との交流が、いかに馬琴に影響を与えたかに着目していた。特に、文政から天保年間における馬琴と知友との交流は、馬琴の日記や書簡が多く残存することでその具体的な様相が浮かび上がる。馬琴の長編読本『近世説美少年録』（文政１２年［１８２９］―天保３年［１８３２］刊）は、篠斎から借りた中国白話小説『檮杌閑評』から構想が立てられている。馬琴が知友から借りた書籍に基づいて作品の構想を立てること、中国白話小説の批評と答評を通して行われる情報交換など、馬琴と知友達が相互に与え合う影響は大きい。その中で黙老も、自身で著した小説批評を馬琴に送って感想を乞い、馬琴も黙老から借りた書籍の記事を雑記に抄録するなど、互いに影響を受けている。

日本近世後期においては、文人が地域を越えて文化ネットワークで繋がり、書籍の貸借が頻繁に行われていた。髙倉一紀氏「堀内広城の国学―近世蒐書文化論の試みⅡ―」（２０１０）は、蔵書家の文化的機能として、①読者としての“受信者”、②文化的な“情報提供者”、③蔵書を貸す“資料提供者”、④作者と読者とをつなぐ“中継者”などの面をあげているが、黙老もまさに蔵書家の文化的機能を果たしていた。

従来、近世小説の大家である馬琴の作品研究については盛んであったが、馬琴に対して資料を提供する側、影響を与えた人物に関する研究については多くない。黙老は馬琴と批評を交わす「受信者」かつ「発信者」であり、貴重な資料の「提供者」であり、かつ『戯作者考補遺』などを著す「著述者」であった。しかしながら、この様々な面を持つ黙老の著作がどのように成立したのか、という点は解明が進んでいない。小説評論『国字小説通』や随筆『聞ままの記』なども著した黙老がどのような知識源から著述したのか、この課題は、黙老の文事の特徴や性質を明らかにするとともに、馬琴などの文人が受けた影響に光を当てる点で、日本近世文学研究にとって重要と思われる。

本研究では、現存する黙老の蔵書目録（「讃藩黙老木村氏蔵書目録」『高松家老臣木村亘所蔵書籍目録残欠』）を手掛かりに、各図書館や文庫に所蔵される黙老の旧蔵書を探索、把握する。その上でその旧蔵書などに記載される情報を整理し、黙老の小説批評や随筆がどのように成立したかを検証していく。そして、その文学的価値や周囲への伝播について明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

本研究の中心となる黙老がどのような書物を所蔵したかについては、先述したように黙老の蔵書目録がその手掛かりとなる。ただし、これらの蔵書目録については、まだ整理や紹介もされておらず、まずはその整備から始める。また、これまでに知られていた宮内庁書陵部図書寮文庫蔵「讃藩黙老木村氏蔵書目録」に関しては、その書目の記載点数の少なさから、黙老が江戸在番中に集めた書籍の「略目録」と評価されており（木村三四吾『近世物之本江戸作者部類』１９８８）、二つの蔵書目録の成立時期や記載書目の違いなどを明らかにする必要がある。そこで、両蔵書目録の翻刻・紹介などのインフラ整備を行う。具体的には、黙老の旧蔵書を探索・調査し、黙老がどのような書籍を有し、その書籍にどのような情報が記されるのかを検証する。その上で、黙老の旧蔵書の整理を行い、黙老の随筆や批評などの著述に関する知識源を明らかにしていく。

黙老の旧蔵書を判断する基準の方法として、まずは黙老の蔵書印があげられる。黙老の蔵書印は「木村蔵書」および「木村家蔵」の二種の印であるが、一方で黙老の旧蔵書と思しき資料に蔵書印の押印がないこともある。例えば、多和文庫所蔵『房総志料』は馬琴が天保八年頃に黙老に売却したことが、「著作堂雑記抄」から確認できるが、該書には多和文庫の蔵書印および、「瀧澤」「曲亭蔵本」の馬琴蔵書印の押印があるものの、黙老の蔵書印がない。しかし、多和文庫所蔵『高松家老臣木村亘所蔵書籍目録残欠』には、書籍を入れた箱あるいは棚の番号と思われる番号が一から九十六まで振られている。『房総志料』の表紙右肩には「四十番」と書かれた小さい紙片が貼られており、その数字は『高松家老臣木村亘所蔵書籍目録残欠』の記載と一致する（四十番の項目に『房総志料』の書名が載る）。つまり、蔵書目録の番号と表紙右肩部の番号とを突き合わせることで、黙老の旧蔵書と推定できる。この方法を以て、様々な機関の資料を調査し、黙老の旧蔵書を探索する。

そして黙老がどのような蔵書を構築したか、また現存する旧蔵書はどこにあるのか把握することで、黙老の小説批評や考証の知識源を推定することができる。例えば、黙老が著した『国字小説通』（嘉永二年［１８４９］成）には、馬琴作『南総里見八犬伝』（文化１１年―天保１３年刊）と中国小説『拍案驚奇』との関連が考証されている。宮内庁書陵部所蔵の蔵書目録に『拍案驚奇』の記載は見られないが、多和文庫所蔵の蔵書目録には『拍案驚奇』の書名が載り、黙老が蔵書からの知識を得て小説批評を著したことができたと考えられる。そして小説批評だけでなく、黙老の随筆執筆にもその方法を用いることができる。黙老の随筆に『聞ままの記』『続聞ままの記』という書物がある。三重県の神宮文庫や奈良県の天理図書館に所蔵されているが、本書には膨大な量の珍談・奇談が書き留められており、日本近世後期の様々な情報を伝えてくれる資料である。黙老の蔵書を把握することによって、黙老がそれらの情報をどのような資料に基づいて記したのか、その出典について明らかにできる可能性がある。

さらに、黙老の旧蔵書を調査することは、当時彼がいた文化的ネットワークの理解につながる。黙老は馬琴だけでなく、様々な文人・蔵書家と情報を交換していた。『聞ままの記』執筆に際し、柳亭種彦や山崎美成などにも取材して、その情報を随筆に反映させている。また珍書・古書を収集した蔵書家として知られる石塚豊芥子とは、『戯作者考補遺』執筆の際に豊芥子の『戯作者撰集』を大元に据えるという書籍を通しての交流を行い、また磐城平藩中老で『静幽堂叢書』を著した鍋田三膳とも交遊している。

このように、黙老の蔵書構築や書籍の貸借の実態を基底として、黙老の知識源の探求や文人との情報ネットワークの把握など、様々な観点から黙老の文事について分析を行う。

４．研究成果

以上に述べてきた問題意識と研究方法から調査を行った結果、黙老の文事について得られた成果は以下の通りである。

まず、黙老の蔵書目録について多和文庫所蔵『高松家老臣木村亘所蔵書籍目録残欠』および宮内庁書陵部図書寮文庫蔵「讃藩黙老木村氏蔵書目録」の翻刻を公開し、黙老の蔵書構築の実態について検証した。従来「略目録」として知られてきた宮内庁書陵部図書寮文庫蔵「讃藩黙老木村氏蔵書目録」には、およそ３５０点の書目が記載されており、一方、多和文庫所蔵『高松家老臣木村亘所蔵書籍目録残欠』にはおよそ１１６０点の書目が記載されている。このことから、「一棟の倉は蔵書で詰り」（木畑氏）と述べられてきたことの信憑性が高いことが判明した。そして黙老が収集した蔵書は様々な種類に及び（中国小説、漢籍、漢詩、蘭語、随筆、外事・漂流、紀行文、祭祀・有識故実、火術・海防・武具類、歌集・歌論、語学、系譜・通史、伝記、本草・動物・物産類、記録類、通史・武鑑、地誌、茶道・華道書、辞書・節用集、地図・治水、宗教、読本、絵画、歌謡、滑稽本、料理本、神祇、経世、軍事等）、漂流に関するものや、諸外国の情報に関するものも散見された。

そして、『高松家老臣木村亘所蔵書籍目録残欠』を手掛かりに黙老の旧蔵書を探索したところ、黙老の旧蔵書として以下の書目を確認することができた。

- 大阪府立中之島図書館所蔵『塩尻』『銅柱余録』『後の為の記』『日本風土記』『松蔭日記』
- 多和文庫所蔵『房総志料』『日本霊異記』『梅桜日記』『冠辞続貂』『奥州ばなし』『鹿嶋参詣図会』『勢陽雑拾遺』『耽奇図説』『白石先生遺考』『旅の命毛』『月波日記』『宝暦十年庚辰正

月東行ノ話説』『陸奥話記』『玉藻稗史』『王子村若一王子祭田楽躍目録』『肥後国舞々唱歌』『かたそきの記』『上総国村高帳』『美作国風土略』『傘笠考』

- 鎌田共済会郷土博物館所蔵『消暑漫筆』『無人島漂流記』『譚海』『漂流事略／火浣布事略』
- 高松松平家歴史資料・香川県立ミュージアム保管『残欠聡誉乃記／湘山移星集』『龍集説考』
- 国立国会図書館所蔵『鞍鐙新書』
- 東京大学図書館所蔵『甲斐國山梨八代巨摩三郡村高帳』『華陽皮相』『華陽皮相原稿』
- 筑波大学図書館所蔵『古今説海』

そしてこれらの中には、黙老と周囲の文人との交流を示す興味深い資料も発見された。例えば、黙老の随筆『続聞ままの記』追加之巻三「異国漂流一件」は、江戸表へ米を運ぶ船が強風のためバタン国（フィリピン）へ漂着した経験を津田村の勝之助が書き記したという内容の写本であるが、『高松家老臣木村亘所蔵書籍目録残欠』の三十九番の項に「津田村勝之助漂流記　一冊」とあり、香川県の鎌田共済会郷土博物館には三十九番と書かれた貼紙のある『津田村勝之助漂流記』が所蔵されている。したがって鎌田共済会郷土博物館所蔵本が黙老の旧蔵本にあたると判断できるわけだが、本書の中に黙老から「クロス国」という国についての質問と、それに対する馬琴の返答が記された両者の自筆紙片が挟み込まれている。馬琴の日記によると、「讃州勝之助漂流記、脱簡かき入、補綴。」とあることから、馬琴と黙老とが蔵書貸借を通じた知識の交流を行っていたことが伺える。二人の交流の実態が浮かび上がる資料と言えよう。

さらに、馬琴との関係に関しては、黙老の考証随筆『龍集説考』の存在も重要と言える。『龍集説考』は黙老が様々な書物から龍に関する記述を集めたもので、馬琴の日記によると黙老から馬琴に貸し出されていた。馬琴は珍しい龍の絵を描き写させてもいる。興味深いのは、馬琴が黙老から『龍集説考』を借りた後に、『八犬伝』において犬江親兵衛が「狐龍」に関する考証を開陳する場面を描く点である。その中で馬琴は「作者曰、狐龍の事は、格致鏡原巻の八十八、獣類狐怪の部にも、又奇事記を援て、これを載たり。作者の作り設けしにあらず。昔より和漢の博士、龍を辨ずる者多かれども、いまだ狐龍に及べるを見ず。」と、龍の考証において「狐龍」が見過ごされていることを述べるが、黙老が『龍集説考』で「狐龍」を書き足したのは『八犬伝』以降であった。つまり、ここでも黙老と馬琴は「龍」の考証を通じて知の交流を行っていると考えられる。

加えて、黙老は馬琴に中国小説に関する批評を送り、その答評を乞うている。黙老は天保五年に中国白話小説『後西遊記』の批評『後西遊記国字評』（現早稲田大学図書館蔵）を著した。『後西遊記』は『西遊記』の続編で、玄奘が真経を得たものの難解なために人々は解くことができず、唐半偈がその真解を得るために西へ旅立つ物語である。黙老は『後西遊記国字評』において、『後西遊記』における不老婆々が、同じ白話小説の『女仙外史』に登場する柳烟や『水滸伝』に登場する潘金蓮といった淫欲な女性と同様の性質を持ち、戦闘を多く描く作品内において「遊戯」の役割を担うと指摘する。黙老と馬琴は共に中国白話小説に明るいことから、小説批評を通じて小説読解の方法についても意見を伝え合っていた。

また、黙老の交流は馬琴に留まらない。黙老旧蔵書の地誌類の多くに「正斎蔵」の印記があるものが散見される。正斎とは近藤重蔵のこと、探検家として知られるが、書物奉行も務めた蔵書家でもある。その正斎旧蔵の書物を黙老が多く所蔵したということは、二人に交流があったことに他ならない。香川県立ミュージアムには正斎から借りた絵を写した黙老の絵画「アイヌ図」が収まる。黙老が正斎と交流を持ち、多くの蔵書を譲られた様相が浮かび上がる。他にも、黙老の旧蔵書『傘笠考』には山崎美成の蔵書印が押されており、本書は美成旧蔵資料と考えられる。山崎美成は江戸時代の随筆家であり雑学者である。馬琴と考証を巡って論争を行ったことでも有名である。黙老は美成と交遊を持つ前に、馬琴に断ってもいた。その美成の旧蔵書が黙老の旧蔵書と認められるということは、黙老と美成が直接書籍の貸借や譲渡（あるいは売買）を行っていた証左となる。黙老の旧蔵書を探索・検証することにより、黙老が書物をめぐって様々な人物と交流を持っていたことが明らかとなった。

さらに黙老と文人との交流は書簡によっても確認することができる。報告者は鎌田共済会郷土博物館所蔵の黙老宛書簡３通（山崎美成、石塚豊芥子、小津桂窓）を発見した。美成からの書簡には、『随掃篇』や『秘書半千』という美成の著作の書名が見え、『随掃篇』は天理図書館所蔵篠斎宛黙老書翰（天保７年４月２１付書簡、木村三四吾『滝沢馬琴―人と書翰―』１９９８）に見えることから天保７年頃の書翰と考えられる。『秘書半千』も美成の著作であり、黙老の蔵書目録にその書名が確認できる。天保年間に黙老と美成が書物のやりとりを行っていた様相が伺える。豊芥子からの書簡には、弘化頃の合巻の出版に関する状況や、水野忠邦など老中に関する話などが記されており、江戸の豊芥子と讃岐の黙老とが、各地の社会状況を知らせ合う様子が見られる。小津桂窓からの書簡には黙老の随筆『続聞ままの記』の貸借についての記事や、黙老が月僊や奥田三角といった伊勢近辺の文人画を桂窓に求めていたことを示す内容が記されている。黙老は自身でも絵を描いており、香川県立ミュージアムや鎌田共済会郷土博物館に数点の黙老肉筆画が所蔵されている。黙老の肉筆画につ

いては報告者も所蔵しており、その内の１点が南画を思わせる描かれ方である（図版参照）。月僊や三角に影響を受けたか、あるいは南画風の絵に興味を抱いた黙老が彼らの絵を求めた可能性もある。いずれにせよ、黙老宛の書簡から彼の興味関心を伺えることができ、黙老の文事の範囲の広さを知ることができる。

以上のように、黙老の文事を検証していくことで、黙老の蔵書構築の実態や様々な文人との交流が明らかとなった。加えて書簡を検証することにより、黙老の絵事についても光を当てることができた。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、当初の研究期間の約５０％において、図書館や文庫などの調査が十分に行えなかった事情もある。しかしながら、様々な資料調査を通して、木村黙老という讃岐高松藩の武家文人が、いかなる文事を行い得たか、その一端を明らかにすることができたと思われる。今後も黙老の随筆や小説批評、そして絵画について、継続して研究を行っていきたい。

なお、黙老の蔵書目録について考証した拙稿「木村黙老の蔵書目録攷―多和文庫蔵『高松家老臣木村亘所蔵書籍目録残欠』の位置づけ―」（『近世文藝』１１０号、２０１９年７月）が、第１６回日本近世文学会賞を受賞した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 三宅宏幸	４．巻 98
２．論文標題 東随舎の写本随筆『続思出草紙』について	５．発行年 2023年
３．雑誌名 同志社国文学	６．最初と最後の頁 109-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 三宅宏幸	４．巻 28
２．論文標題 曲亭馬琴『自撰自集雑稿』諸本小考ー「馬琴自筆本」への疑問ー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東海近世	６．最初と最後の頁 21-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三宅宏幸	４．巻 110
２．論文標題 木村黙老の蔵書目録攷ー多和文庫蔵『高松家老臣木村亘所蔵書籍目録残欠』の位置づけー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 近世文藝	６．最初と最後の頁 15-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20815/kinseibungei.110.0_15	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 三宅宏幸	４．巻 10
２．論文標題 〈宮本武蔵もの〉実録の展開ー『兵法修練談』『武道小倉袴』『袖錦岸柳島』系統を中心にー	５．発行年 2018年
３．雑誌名 読本研究新集	６．最初と最後の頁 151-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三宅宏幸	4．巻 7
2．論文標題 曲亭馬琴と木村黙老の関係	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6．最初と最後の頁 105-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三宅宏幸	4．巻 67
2．論文標題 木村黙老の蔵書目録（二）―多和文庫蔵「高松家老臣木村亘所蔵書籍目録残欠」（下）―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 愛知県立大学説林	6．最初と最後の頁 57-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三宅宏幸	4．巻 10
2．論文標題 木村黙老の蔵書目録（三）　―宮内庁書陵部図書寮文庫蔵「讃藩黙老木村氏蔵書目録」―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 愛知県立大学日本文化学部論集	6．最初と最後の頁 55-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三宅宏幸	4．巻 2018
2．論文標題 馬場家蔵『宮本無三四一代記』下巻の表紙	5．発行年 2019年
3．雑誌名 馬場家研究報告	6．最初と最後の頁 5-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 三宅宏幸
2．発表標題 東随舎『続思出草紙』の検証と考察
3．学会等名 日本近世文学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 三宅宏幸
2．発表標題 『自撰自集雑稿』及び詠草・画賛・短冊
3．学会等名 東海近世文学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 三宅宏幸
2．発表標題 曲亭馬琴『自撰自集雑稿』諸本小考ー「馬琴自筆本」への疑問ー
3．学会等名 東海近世文学会
4．発表年 2020年

1．発表者名 三宅宏幸
2．発表標題 木村黙老の蔵書目録攷 ―多和文庫蔵『高松家老臣木村亘所蔵書籍目録残欠』―
3．学会等名 日本近世文学会
4．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

1．著者名 三宅宏幸	4．発行年 2022年
2．出版社 汲古書院	5．総ページ数 536
3．書名 馬琴研究	

1．著者名 二本松康宏、中根千絵編	4．発行年 2021年
2．出版社 三弥井書店	5．総ページ数 222
3．書名 城郭の怪異（内、三宅宏幸「姫路城―姫路城―変遷するオサカベ―」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関